# シリーズ　私の一冊の本

**看護学部　　西田公昭　先生**

## 加賀乙彦著『悪魔のささやき』

**閲覧室2階　326.34/ka16　　集英社　出版**

悪いことをした人は、本質的に悪い心の持ち主なのでしょうか。逆に良いことをした人は、本質的に良い心の持ち主といえるのでしょうか。そんな疑問が私にはずっとあります。人間の心理を研究していて、この真逆の行動をとった両者でも、心理的には、実はあまり違わない人間なのかも知れないと思うようになってきました。そのきっかけとなったのは、オウム真理教の事件でした。私は、この１５年の間、その被告人たちと向き合ってきました。そして世間から優秀と目されて、著名な大学や大学院に進学して前途有望であったはずの彼らが、なぜ、いかにも怪しげなリーダーに付き従い、無差別殺人のようなあからさまな凶悪犯罪にさえも手を染めたのか、その心の闇に潜む謎を解明したいと考えてきました。

本書はこのような問題について、するどい心理分析からヒントをくれています。つまり、人は意識と無意識の間のふわふわとした心理状態にあるときに、罪を犯したり、自殺をしたり、扇動されて一斉に同じ行動をしてしまったりする。その行動への後押しをするのが、「自分ではない者の意志」のような力です。それが「悪魔のささやき」です。誰にでも潜んでいて、心弱った人間の背中を「ポンと押す」ものである悪魔は、オウム真理教事件の被告人の犯罪行動を的確に言い当てていると思いました。つまり、戦後民主主義における「個」のない脆弱な日本人の精神構造、若者をオウム真理教への走らせるに至った豊かさを餌に太り続けた悪魔のささやき。これこそ、善良なる人を悪事にとかりたてる恐ろしい敵なのだと説明されています。

筆者である加賀乙彦氏は、精神科医、心理学者そして作家として半世紀以上にわたり日本人の心を見つめてきました。特に筆者は、拘置所の精神科医として多くの死刑囚や無期懲役囚とかかわってきた方で、悪魔のささやきという発想はその経験から生まれたのだろうと推察できます。なお、死刑囚を描いた小説の『宣告』は、映画化されるほどのベストセラーになりました。本書において加賀氏は、戦前の軍国主義、六〇年代の学園紛争、オウム真理教事件、世間を震撼させた殺人事件など数々の実例のもとに、悪魔のささやきの正体を分析してくれています。そのうえで筆者は、これからの私たちが、このような悪魔のささやきをいかにして避けるかについて方策を提言しています。

本書が、私を魅了したのは、何か自分の見ようとしている人間心理の本質的な弱さに共感したのではないかと思います。私が拘置所で面談し、法廷で出会ったオウム真理教事件での被告人たちは、皆とても優しいし、礼儀正しいし、真面目な人でした。彼らにささやいた悪魔は、決して特別な人々にだけ棲みついているのではなく、私や本学のすべての人にも棲みついていると思います。そして私らがうっかりしていると、意識の周辺に入ってくる無数の情報に動かされて、いつの間にか自分の頭で考えたり、反省したりしなくなったりするのだということを、是非とも肝に銘じて生きていかなくてはいけないと考えています。本書は、そんなことを考えさせてくれた良書でした。